

神さまが用いてくださる

古 本 靖 久

奨励者紹介〔ふるもと・やすひさ〕

日本聖公会桃山基督教会牧師

日本聖公会司祭

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりてまた山に退かれた。

(ヨハネによる福音書 6章1―15節)

一緒に食事をするイエス様

先ほど読んでいただいた聖書の箇所ですが、「五千人に食べ物を与える」という小見出しが、新共同訳聖書には書かれています。5000人の人を、イエス様がわずかな食べ物しかなかったのに満腹させる。簡単にいうとそのような不思議な物語です。

この出来事ですが、聖書には四つの福音書がありますが、そのいずれにも書かれています。さらに4000人バージョンも別にあり、この「一緒に食事をする」ということは、とても大切なものだったようです。

しかし正直なところ、5000人で一緒に食事をするといっても、普通そんな経験をするとはなかなかないでしょう。花火大会とか野球観戦とか、そのようなところで何かを食べることはあるかもしれませんが、一人の人の手から分け始められた物で、みんなが満腹になる。想像しただけで、なんだか楽しくならないでしょうか。

イエス様の元に集まる人々

ではもう一度、物語を振り返ってみましょう。イエス様はこれまで、さまざまな人をいやしてこられました。聖書に書かれていない出来事も多くあったでしょう。イエス様の元には、その噂を聞き付けてたくさんの人たちが集まってきました。

先日、フランスのルルドに行った人から話を聞く機会がありました。ルルドはカトリックの巡礼地で、その泉の水には病気をいやす奇跡の力があると信じられています。その方ですが、そこに行ってびっくりしたそうです。その泉に向けて、行列ができていた。それもかなり長い行列です。中には松葉杖をついている人や、自分の力で歩くことができずに担架で運ばれている人もいたそうです。

イエス様が活動されていたころにも、イエス様にすがろう、イエス様に何かを求めようという人たちが、きつと長い列を作りながら集まってきたことでしょう。ボロボロの服を着て、足を引きずりながら、何かを求めている。

そのような人々がイエス様の元にやってきたわけです。イエス様は、山に登って弟子たちと一緒に座っていました。するとふもとからどンドン、どンドン、人が押し寄せてくるわけですね。それもみんな疲れ切りながらも、必死に登ってくるのです。

この人たちに食べさせるには

イエス様は、その群衆を見て弟子の一人に話しかけます。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばいいだろうか」と。イエス様の視線の先には、5000人の群衆がありました。その人たちが飢えていることも、イエス様は気づかれたのではないのでしょうか。

しかし弟子が言うように、その5000人という群衆を満腹させるには200デナリオン、今でいうと200万円くらいのパンをそろえても足りない、それが現実なのですね。

もしあなたがその場にいたとしたらどうでしょうか。群衆の一人だったとしたら、そこに食べ物がなかったとしても、文句は言えないと思います。配給を求めてイエス様の元に来たわけではないですし、今までイエス様が病人になさったしるしを見て来たのですから、そこに食べ物がなかったとしても問題ではない。

ではあなたが弟子の一人だったとしたら、どうでしょう。人々が自分たちの元にどンドン集まってきます。でも手持ちの食糧はない。そもそもそれだけの人に食べさせる必要があるのかという思いももつかかもしれません。

しかしイエス様の方をちらっと見やると、じっと群衆を見えています。イエス様は群衆を見捨ててどこかにいくようなことはないだろう。でもだからといって、いったいどうしたらいいのだろうか。

ありますよね。何かをしたいけれども、自分の許容範囲をはるかに超えてしまうこと。わたしもいろんなことを安請け合いしてしまい、気が付いたら大変なことになっているということがよくあります。5000人に食べ物を配るなんて無理だ。そんなことできっこない。群衆を解散させるかどうにかしてくれ、もう知らない。

食べ物を差し出した少年

弟子たちが心の中で、このような叫び声をあげている中、一人だけ違う行動をした人がいました。それは一人の少年でした。この少年は誰かについて来ていた奴隷であつただろうと思われます。この少年は、

弟子のところに行って自分の持っている食糧を差し出しました。

少年にとっては、持っているすべてだったのでしょう。彼の手には大麦パンが5つと魚が2匹。きつと、満面の笑みを浮かべて、「ねえ、困っているんでしょ。これ、使ってよ」と言いながら、弟子の手に渡したのでしょう。

あなたが弟子だったらどうしますか。「ありがとう」と言って、そのパンと魚を受け取りますか。それとも首を振りながら、「悪いけど、こんなものもらって、何の足しにもならないよ」、そう答えるでしょうか。

イエス様の弟子の一人が出した答えは、後者でした。「けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」。

確かにそうなのです。5000人の人がそんなわずかな食糧で満足するわけがない。常識的に考えればそうなのです。確かに常識では。

何の役にも立たない

少しここで、わたしの話をしたいと思います。わたしは今こうして皆さんの前で話しておりますが、本当はそのようなことをするのにふさわしい者ではありません。

わたしは福岡で生まれましたが、その家には仏壇も神棚もある、いわゆる日本的な家庭でした。それが中学のときにキリスト教系の学校に入学して、教会に行くようになり、高校3年生のときに洗礼を受けたのです。そのときの洗礼は、わたしにとっては特別のものでした。といいますのも、中学3年のときに一度、洗礼を受ける準備をしていたからです。

ところが親の反対にあい、3年間待ちました。3年間ただひたすら、洗礼を受ける日を待ちわびていた。そして大学で熊本に行くことになって、一人暮らしをする前によく洗礼を受けることができたのです。

でも自分の中で、それがゴールになってしまいました。洗礼を受けて、それで満足してしまったのです。もうこれでいいと勝手に思っていました。大学に行って、慣れない土地で生活をします。「来週こそは教会を探そう」、「クリスマスぐらいは教会に行こう」、そう思いながら教会から足が離れ、いつの間にか 20 年近くが経っていきました。

しかし入院をきっかけに、また教会に戻ることにになります。その辺のことまで話し出すとかなり長くなりますので割愛しますが、教会に戻ってからしばらくは、神さまに謝ってばかりでした。何度も何度も、「ごめんなさい神さま、今まですいません」それしか祈れませんでした。

20 年近く教会から離れていたときに、たくさんの人を悲しませてきました。多くの人たちを裏切ってきました。そして何よりも、神さまに背を向け、神さまなんて必要ないと叫びながら暮らしていた、その日々を後悔していました。神さまはこんなわたしを、許してくれなどしない、そう思っていたのです。

それからずっと教会には毎週行き続けます。でもそこにあるのは相変わらず懺悔の気持ちだけでした。そんな中、結婚を機に介護の仕事に携わるようになりました。そこは特別養護老人ホームなどの、さまざまな施設が集まったところで、わたしは月に三回ほど宿直に入っていました。

すると不思議なことに、わたしが宿直に入った晩に人がよく亡くなっていくのです。他の人のときには何も起きないのに、わたしのときだけ決まって何かが起こります。わたしは祈りました。これはどういうことなのだろう。なぜ自分の前にだけ、死が見せられるのだろう。祈り、祈り、祈った結果、示されたのが、牧師へ

の道だったのです。

最初は信じられませんでした。あんなに神さまの元から離れようとしたわたしが、そんなことできるわけがない。何かの間違いだ。でも神さまは離してくれないのです。どんどん牧師の道に引きずりこまれていくのです。

そんなときに、出会ったのが今日のみ言葉でした。奴隷であった少年は、手に持った大麦パン5つと2匹の魚をすっと差し出します。「何の役にも立たない」。周りの人は言います。でも彼は、何のためらいもなく、手にしたパンと魚をイエス様に委ねるのです。

大麦パンとは、普段は家畜に食べさせるようなものです。でもその大麦パンと魚を、イエス様は祝福して用いてくださった。大勢の人が食べて満腹し、さらに12の籠いっぱいにあふれるほど、少年が差し出したわずかな糧は、大いに用いられたのです。

神さまが用いてくださる

わたしたちも同じなのです。こんなわたしにできるわけがない。わたしなんか役にたつはずがない。いえ、そうではありません。どんなに小さなものでも、わずかなものでも、人から見たら取るに足りないものでも、神さまは必ず用いてくださる。常識で考えたら無理かもしれない。しかしそれでも、神さまはわたしたちを用いてくださるのです。

わたしたち、こうして見渡しても、完全な人間など誰ひとりいません。コンプレックスだってたくさんあるでしょう。でもそれ以上に、みなさん、素晴らしい賜物をいっぱいいただいています。神さまはわたしたち一人ひとりにたくさんの恵みを下さっています。

それは笑顔かもしれない。賛美する歌声かもしれない。人の悲しみに心を寄せるその優しさかもしれない。神さまはそんな素晴らしい賜物をもったわたしたちを招いておられます。どうぞその賜物を神さまの前に差し出してください。どうぞ神さま、この賜物をお使いくださいと委ねてください。その時に神さまはあなたを必ず用いてくださいます。

2016年7月13日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録